

---

# **自由のツバサ ~loneliness in god blessing~ 連載バージョン**

飛焰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

自由のツバサ ~loneliness in god~  
ssing~連載バージョン

### 【ZIPPED】

Z8937D

### 【作者名】

飛焰

### 【あらすじ】

自由のツバサ（短編）の連載タイプです。誤字を無くして見やすくしたタイプです。庵君のお話し……みてください。エピローグから始まりプロローグで終る奇異なお話し……4部構成です。エピローグ 前編 後編 プロローグとお読みください

## Hピローグだけど、始まり

自分は何時も1人だつたと思つ……  
誰も信じれなくて。

誰からも期待されず。

誰も本当の僕を知らない。

本当の僕は……「みんなに笑つたりしない。  
偽りの僕はただ愛想笑いとかするだけ。ただの演技だ。  
そんな僕の何が良いのか？ 多数の女子から告白された。  
どれも断つたけど。

誰も表の僕しか見えて無い。都合のいい所しか見えてないんだ。

形だけの友人。煩いだけの先生。  
どれもが、本来の僕を知らない。  
本来の僕は、優しい人なんかじゃない。  
心にいつも……

兄貴に対する嫉妬の感情があるからだ。

そんな自分が醜かつた。  
自分でも僕は馬鹿だと思つ。

僕はただ兄貴の影を背負つて行くだけだから……  
兄貴が凄いのは分かる。  
だから憎いんだ……より一層に……。

今回もまた……

兄貴の賞をただ眺めるだけなのだ。

『八神の落ちこぼれ』

それが、世間が抱く僕に対する目だ。

父親は大財閥の総帥。

母親はフィギュアスケートのオリンピックの金メダルの常連選手。

長男は親父の会社を継ぐ事になる技量がある。

長女は大病院の御曹子の息子との結婚が決まった。

それぞれがそれぞれの道を進んでる。エリートの道を……次男もだ。

兄貴はピアノの道を進みだした。今では金賞の常連だ。

そうして僕……僕は何も長けている物がなかつた。  
兄貴より僕はピアノを前からやつっていた。

5歳から……高校2年に至る今まで……ずっと……。

でも、賞は1つも取つた事がなかつた。  
いくら練習しても。

いくら楽譜を繰り返して見ても……。  
1つも賞を取つたことがなかつた。

『才能が無いんだから止める』皆が皆、僕にそう言つ。

僕は何回も……何回も……幾度も。

苦虫を呑えていた。

誰からも期待されず。独学でピアノをやり。何度も土下座してコンクールにだしてもうらつた。

しかし……結果は惨敗。

当初は先生が居なかつたからだ。と、何度も自分に言い聞かせていた。

できない子に講師をつけるほどウチの親たちは甘くなかった。

ある日、どういうわけか、兄貴もピアノをやり始めた。

初めてのコンクールでイキナリ金賞。

それから、コンクールがあるたびに兄貴は金賞を取つていった。

『天才現る!』新聞の見出しに3冠した次の日の新聞に載つた。

兄貴にピアノの講師がつけられた。  
僕にはつけないで……。

何度も悔しい思いをした。何度も何度も何度も。  
僕はアイツの影に隠れていたのだ。

光を浴びる兄貴。

その影で光を憎む、『闇』が本来の……  
本当の自分だから。

???

もう、夕方か……。

音楽室から外の夕日を見る。

野球部やサッカー部の声が聞こえてくる。

僕は起き上がり、外の夕日を眺める。

眺める事しか僕はできないのだ。

僕は……何時だつて

「僕は……」

ピアノに目を向ける

床には、楽譜が散らばっている。

僕がやつたものだ、自分の才能に嫌気が注して。

ピアノも、兄貴からもオレは逃げ出したんだ。

もづ、なんでピアノを始めたか分からなくなつた。

練習用のピアノも兄貴に取られ、僕には学校の音楽室で練習するしかなかつた。

「・・・・・・・・・・」

今、ピアノを止めたら……僕には何も残らない、全て、消え失せる。

今までの時間も。苦労も……そして涙も。  
何もかも……全て。

悔しい悔しい悔しい悔しい！！

凄く悔しかつた、僕の有一の趣味であつたピアノも夢でもあつた金賞も全て消えるのだ。

何年も努力して努力して……何回もやつたピアノを止めよつと思つた自分が憎かつた。

悔しくて涙が止まらなかつた。

最後に泣いたのはいつだつたろうか。

兄貴に初めて賞を取られたからだろうか？

水が楽譜にポタリと、落ちた。

止めようと思つても止まらなかつた。

これで、ピアノとはおさらばしよう。

半泣きの状態でピアノとやつと、向き合つ。

引いてみればわかる。10年以上の『無駄』な時間の結集を。

適当に楽譜を拾い立て掛ける

そうして、ピアノと最後にもう一度向かい合い、鍵盤に指を駆け巡らせた

引き終わった……。

自分でも思つ、兄貴なんかこの何万倍も上手いじゃないかよ。

涙も止まり、落ちていた楽譜を拾おうとしたしがんだ時のことだつた。

「キャッ！－！」

ドスン！ と、音を発して誰かが倒れてきた。

泣いていた事を知られたくなかつた。だから倒れてきた人を見ない事にした。

多分目が赤くなつてゐるだろう。

「イタタタタア？ あ！ スミマセン！ 邪魔ですよね！ 今、  
出て行きますから

声からいつて女性だらう。

「いいよ、別に」

最初は、自分でも何を言つてゐるか分からなかつた。

「うう、暫らくして気がついた最後の最後……」

自分でも未練がましいと思つた。

最後は……観客が居る前でピアノを引きたかった。

「僕の、本当の最後の演奏だから……聞いてくれないかい？」

笑顔で僕は彼女に向かいそう言つた。

適当な楽譜を掴み椅子に座り直す。

集中する。最後で観客が居るから失敗したくなかった。

告別式……だから。

鍵盤に神経を集中させて、鍵盤を叩く。

ポロン　　と、綺麗な音色で演奏を終える。  
こんなヘタクソの演奏よりコンクールへ行つて聞いた方がいいであ  
るわ。  
特に、兄貴の……。

席を立ち、楽譜を拾おうとした時だった。

パチパチパチ……　と、大きな拍手が音楽室に響き渡つた。

「凄いよキミ……　凄く音色が綺麗……」

「凄くなんかない」

「イヤ！　それが凄いんだよ！　それはね、誰にもできるってな物  
じゃないんだよ」

「練習さえできれば、誰にだって……」

できるや、僕なんかより上手にね。  
そつ言おうとしたが言えなかつた。  
彼女が口を押されたのである。

「そんなこと言わないの 自由がある翼わね、いっぱい羽ばたかな  
いとね勿体ないんだよ？ キミはそれを持つてんだから」

彼女はそうにこやかに答える。

僕は彼女の笑顔にドキッ。と、させる。  
彼女の笑顔に見惚れてしまつていた。

！…ツ。正気を取り戻せ…！

「翼はもがれたよ……ずっと前にね」

兄貴に、ずっと前にね……。

僕がずっと一番望んでいた……一番欲しかった翼は。  
だから、羽ばたくことなんて、できっこ無い。

「だから……これで、お別れなんだ」

「もつたひない。キミは。飛ぶ力があるのに

そんなの、僕に存在しない。

ツバサは……もがれたのだから。

彼女はなんでそんな事を言うのだろうか？ 彼女は僕の何を知つて  
るんだ…！

「キミに僕の何がわかる…！？ キミは本当の僕を知らないだろ！  
！ なんでそんなに無責任なんだよ…？ 僕の気持ち… キミに分  
かるか…！」

「わかるよ

彼女は優しい顔で僕に向かい合つて。こう、答えた。

『キミのピアノにキミ自信が存在してるんだよ

と……。

この言葉が頭から離れなくなつた。

「キミがピアノが好きな気持ち。…………っぽい。伝わったよ」

「！」

「キミは人を優しくするほど、綺麗な音を出せるんだよ」

彼女の言葉が全てが僕の『闇』を攻撃していた。

1言1言が僕を光へ誘う。

僕も……アソコへ行けるのだろうか？

八神の落ちこぼれの……僕が？

ずっと、光に当たりたかった。

ずっと、光に当たる兄を憎んでいた僕が。

光なんか浴びれるはずが無い。  
スポーツ

自分でも卑屈だと思う。

そして、いつも光の影に隠れるだけの僕が……？

「大丈夫 キミならできるんだから。私が、保証するんだよ？」  
「キミは？ 気安く……気安く僕の中に入り込むなよ！ キ

「ミは、何様だよ！　僕の……何を分かってるつもりだよ。僕は！」

ピアノをやめるつもりで今日やめたんだ！！　今更、なんだ！！

！　僕は……何をしたら……いいんだよ」

初めてだろう、他者に本当の醜い自分を見せたのは、本音を吐いた事に、自分で驚いた。

嗚咽が止まらない。

僕は彼女を見上げるしかなかつた。

「キミは、神様って信じる？」

「はっ？」

唐突に、彼女が聞いてきた。

「私はね……」

一回間を空ける。

彼女が口を開けようとした瞬間だつた。

「あら、見つかっちゃつた？　つまんなーい」

大きな黒づくめの大男達が入つてきた。  
当然イキナリの事に僕はたじたじになる。

「神様はね

ちゃんと居るんだから

彼女はそう言い残し教室から立ち去つた。

「庵！ おーい。起きてるかあ！」

僕の頭の中から彼女が消えることが無かつた。

昨日……僕は彼女が気になり、音楽室から出ていった時にすぐに彼女を追うようにでて行った。

しかし、影すら消えていた。

「庵！ 無視しないでくれ！！」

「ん？ 羽岡か……」

「羽岡か……じゃ、ねえよ……」

コイツは羽岡博<sup>はねおかはくと</sup>十。僕の友人だ。

サッカー部のエースストライカーだ。コイツの力でサッカー部は国上で優勝。名実ともにサッカー部の救世主だ。

2年を差し引いて1年生がサッカー部のキャプテンとなつた。

人望も厚く人情に弱い。

どこぞの主人公なんだか。

現3年生も納得してゐらしい……。

「庵！ 賴みがあるんだけど？」

「数学の宿題か？ つたぐ、持つて来い教えてやるからよ」

「さつすが！ 持つべきものは頭が良い人材もとい！ 親友だよな！」

羽岡は自分の机に向かい、筆記用具を用意する。  
後ろに人の気配があるので振り返つて見る。

居たのは、クラス委員長の東雲ゆかり<sup>じののめ</sup>……僕の女友達だ。

「東雲もかよ？ つたぐ、しつかり頼むぜ委員長」

「いいじょん 私は[与]せてもらうけど」

「あ、ズリ ぞ！ 東雲！－！」

「早いもの勝ちよ！」

「オレが先に庵にお願いしたんだぞ！－！」

「いいじょない」

僕の席の前で喧嘩しないで欲しい。  
「わざわざ……」

「「庵」－！」

とばっさりも要らん！

「「わざわざ……！ 前等2人とも教えてやるから座れ！－！」

「「は、はい！－！」

チャイムが鳴るまでの10分弱。

僕は羽岡、東雲と数学の宿題を手伝っていた。

僕の隣の席が空いてるので机を付けて。東雲を座らせる。  
もちろん羽岡は地べただ。

知つていただこいつ等、まったく数学ができなかつた。  
ためしに小学生にも分かる問題を出す。

× 1 1 9 2 2 9 6 2 × 6 4 8 9 2 2 9 9 × 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ×

0 ^

を、だしてみる。もちろん答えは『0』だ。

どんに大きな数に0をかけても答えは0になるからだ。

それを、あいつ等ときたら……。

羽岡博十「数え切れないほど」>

東雲ゆかりく庵もすぐにできないくせいに……>

なのだ。……頭痛薬ヲクレナイカ?

2人共数字じゃないし……

しかも、東雲のヤツ……僕を馬鹿にしてるな。つてか、愚痴か?

愚痴なのか!?

「はあ~」僕は「」にも絶望した。

「転校生を紹介するぞ」

大野がSHRショートホールームが始まつた途端、そんな事を言った。  
当然、転校生だ。クラスが騒がないはずじゃない。

「男ですか? 女ですか!~?」

と、男子。

「喜べ男子、女子だ」

と、大野は答える。

男子は歓声を挙げる。女子はなーんだと落胆する。

「可愛い子ですか？」

と、羽岡が質問する。

「ハツキリ言うぞ……」

## 一同が息を飲む。

たて疋(ひの)の積はと済めて力野力口を開く

「絶世の美人だ」

最後の方、男子が壊れてないか？

「  
入れ」

大野が短くそう言つ。

「はい」

澄みきつた女性の声だった。

ガラガラと、扉が開く。

あんなに騒がしかつたクラスが一気に静まりかえつた。

「神崎魅瀬です」  
かんざきみらい

僕はハツとした。  
彼女は……昨日の？

彼女は……昨日の？

「魅瀬さんは、3ヶ月だけ親の事情でこの学校に転入することになつた。短い間だが仲良くするように」

大野の言葉に誰も反応しない。

クラス中が彼女……神崎魅瀬に見惚れたためだつた。

男女構わず見惚れてしまうような完璧なその姿に……。

白髪しらがと言つより汚れの無い純白が似合う白髪はくはつ

紫外線すらも見惚れて、与える事を忘れてしまつたかのような白い髪に白い肌。

僕も……その内の一人だ……彼女に見惚れた

白髪の髪が太陽の光を受けて普段より輝きが増してゐ……かもしれない

それが、第一印象だつた。

幻想的……

僕も……その内の一人だ……彼女に見惚れた

「席は……そうだな。八神の隣が空いてるな」

「先生……僕の隣の席も空いてますよ！！」

「下心があるヤツの隣にはさせんよ」

クラスが笑いに包まれる。

先生……僕が女に興味が無いって遠回しに言つてませんか？

それって果てしない勘違いですよ？

と、ツツ「ミを入れてる間に彼女が近づいていた。

「久しぶりってか昨日ぶりだね？」『庵』

！？ ボクの名前を知ってる？

「なにつ！？ 彼女を知ってるのか八神庵い！！」

すると、先ほどの馬鹿が声を挙げた。

「昨日少し話しただけだよ。五十嵐遊馬様」

「キサマに様を付けられたくないわ！！」

「いやいや。ウチより名門だからね。一応ね」

「鬼、鬼鬼鬼鬼鬼・・・・・鬼又魔鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼

鳴呼！……！」

壊れたか。

この馬鹿は五十嵐家の1人息子の五十嵐遊馬。

五十嵐は不動産屋の父親を持つ、しかも、世界を股にかけるほどにな。

ま、クラス1のナンパヤロウだけど。

「まあ、よろしく」

「うん」

「こらあ！ 逃げる気か！？ 八神庵いいいいいいいいいい！」

「お前なんか眼中にないよ」

「八神庵いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」

「いい！……！」

ヤツの叫び声と同時にチャイムが鳴った。

際目付けに、大野のチョーク投げが顔にめり込んだ

今は昼休みの途中。

「・・・・・・・・・・・・」

「なんだよ？ 東雲？」

僕達はいつもの場所で昼食をとっている。

メンバーは。僕、羽岡、東雲、なぜか五十嵐である。

「ふん。乙女心もわからぬクズが何を」

「可が言一に一いどな？」

「三人共黙るなよ……」

僕がいつたい何をしたというんだ？

「あ、そうだ。東雲？」

く、  
黙るなよ。

「頼まれてた、映画のチケット。頼まれてたヤツ手に入つたんだけ  
ど。それが、卓兄さん、何を勘違いしたか2枚くれたんだけどさ、  
一緒に「神崎さんと行けば?」はつ? お前が欲しこつて言つたか

「し、東雲？」

なんで怒ってるんだよ？

僕なんかやつちゃいました？

# クソ野郎

神崎が転入してから2ヶ月近くたつた。時期は真冬の12月

「庵 お昼一緒にたべよ」「

神崎とゆかりが同時に誘つてきた。

2人共睨み合つてゐる……後ろにサルとイヌが見えるのは氣のせいだ  
ろう。

僕が東雲をゆかりと下の名前で呼ぶのにはワケがある。

たしか、神崎が転入してきた時だつたが、ゆかりが何故か怒つて  
た時だつたな。

あの時、頼まれてた映画のチケットをゆかりに渡そうとしたなんだけ  
ど言つことを無視しやがつて、なんだかんだあつて僕がゆかりを名  
前で呼ぶことでなんとか和解したのだ。

今から思ふと懐かしい。

そんな干渉に浸る暇はこの2人が「えてくれないのだ。

「庵は1年の時から私達と一緒にお昼を食べてたの……  
「たまにはいいんじゃない? 他の人だつて?」

何回このやり取りを繰り返してるんだよ?

1ヶ月ほどこのやり取りを何度も僕の前でやっている。

他のクラスメートもこの2人の中には……訂正

「魅瀬ちゃん。八神庵なんかほおつておいてこの、五十嵐遊馬とい  
一緒に「「黙れ！！」」グハア！！ ふふ、魅瀬ちゃん、キニの愛  
のムチ……受け取った……よ」

血を吐いて、馬鹿五十嵐は倒れた。  
懲りないやつだ……。

「はあ～」

今日も果てしなく絶望するのだった。

そんな時だった。

「八神い！！」

担任の大野が罵声を挙げて教室に入つて來た。

「なんですか？」

助かりました、大野先生。

内心大野に感謝する。

「お兄さんが……悠一君が交通事故にあつた……」

「！ 兄貴が？」

「意識不明の重体だそうだ」

「・・・・・・・・・・・・・」

兄貴が……死にそう?

自分の心がどちらに片寄ってるかわからなかつた。

兄貴を恨む自分と。

すでにピアノをやめて普通の兄貴の弟である……僕。

自分がだちらに片寄ってるか自分でも何がなんだか分からなかつた。

「」の日僕は早退して操姉さんの旦那が勤める病院へ急いだ。

「……悠一兄さんは?」  
「生と死の一枚皮……」

操姉さんはそう僕に向かいそう言つ。

僕は「そう」と、だけ軽く言つ。

長椅子に腰を落す。

僕はただ見るだけ

今後の展開を……。

ただただ、見るだけ。

心の闇と孤軍奮闘しながら……

兄貴は一命を取り留めた。

ただし、当たり所が悪かつたらしく、兄貴の左腕が使い物にならなくなつた。

別に兄貴は右利きだから別に生活に支障は無いが。

ピアノが出来なくなつた。両手で弾くピアノだ……片腕では弾くのは無理だ。

やううとしたらできる。でも……それは編曲をしなければ不可能だ。

兄貴ならできる……才能があるから

「諦めるよ。悔しくもない」

僕は兄貴のその一言でカチンと、きた。

「ふざけるな……」

「落ちつけ！ 廉！……」

卓兄さんが僕を羽交い締めにして押さえるが僕はそれを払いのける。

許せなかつた「ピアノを辞めるの？」

と、聞いたら兄貴はそう即答したからだ。

自分の才能に嫌気が刺しあんなに好きだったピアノを兄貴に譲り

。

凄く悔しかつた。

ピアノを辞めた次の日にはただ手を見てることと、彼女の言葉し

。

か頭に無かつた。

「才能があるのに… あんなに練習したんだろ… なんで、即答できるんだ…！」

「庵！」

卓兄さんが制止するが僕は止まらない。

「なんで、すぐ諦めれるんだよ…！ なんで、悔しくないんだ…？」

「始めから、ピアノをやる気は無かつたからだ」

「悠一も…」

身体中の血が頭に血液が熱く。灼熱の炎のように熱い血が僕の頭に昇つて行く。

悔しさが、憎しみが、人間の不の感情が全て僕の身体を駆け巡った。そして、頭の血管が切れた音が脳内に響いた。

「やる気が無かつたのに、僕からピアノを奪つたのかよ……」

「…・・・・・」

「庵も悠一も…！ 落ちつけって…」

「卓兄さんに僕の気持ちがわかるか…！」

僕は卓兄さんに罵声を擧げる。

「あんた等、ここは病院よ？」

操姉みだねさんが入つて來た。

その時、卓兄さんが説明しようとした時、力が緩んだ。

僕は卓兄さんを払い除けて病室を飛び出す。

僕は  
ただ  
闇雲に駆けていた  
。

商店街を抜けてから、雨が降り始めた。  
服が濡れ、靴までも濡れてしまつてゐる。

身体が重い……。

疲れた……。

身体中が熱い……。

雨足が強くなつていいく中、僕は行くアテも無く僕はずつと走つて  
いたのだった。

途中で勢い良く転ぶ。

立ち上がろうとするが力が入らない。  
走る気力さえ無い。

服が濡れて気持ち悪い……。

目から、雨以外の水が手に生暖かく……じつとりと。  
何粒も何粒も……目から落ちていつた。

暫らくして立ち上がる。

そのまま路地裏にひつそりとしていたネコを見つける。

「お前も……1人……イヤ、1匹か？」

「ニヤー」

「そうか……そ、うか……」

ネコがこちらに近づく。

僕の目の前に座る。

「シャー」

ネコは再び路地裏に歩いて行く。

「付いて来いつてか？」

「ニヤー」

僕はネコにつられて路地裏にひつそりと佇んだ。

「1泊ありがと」

ネコにそう言い、僕はその路地を後にする。

「ニヤー」

またな！ そう言いたいのだろうか。

野良なのにせけに懐くじやねーかよ。

僕は気が付かないうちに口元を緩めていた。

「・・・・・・・・」

昨日とは違ひ雲一つもない快晴の空……。

僕は足を進める。

当然、アテも無く。

……でも、冬だからめっちゃ寒い……んだが？

財布の中を確認する。

12000円……十分ある。

今後泊まる際はネットカフェを使おう。

2週間ぐらいはもつだろう。

「庵！…」

呼ばれたので振り返る。

歩道橋の階段で羽岡と、ゆかりが居た。  
逃げ様と思つてたら逃げていた。  
だけだ、逃げ様と思わなかつた。

2人が近寄つてきた。

「庵！ 卓さん達探してたんだぞ！？」  
「ノープランで飛び出すなんてアンタらしくないじゃん！？」  
「そこじゃないと思うぞ……ゆかり…？」

僕はちゃんとシシ「//」を入れてやる。

「服もこんな濡れて……」

「雨の中走ったからな」

僕は自分のポケットから【アレ】を取り出してバレンこよひにゆかりのバックに入れる。

「庵、帰つた方が良い」

羽岡が心配そうに聞いてくる。

「…………そつかもな」

「なら！」

「…………でも、帰つたつて何も無い」

「いお…………り？」

ゆかりが驚いた顔で僕を見てきた。

「僕にはピアノも…………何もかも！―― 全て――」

「お、おい。庵？」

羽岡が手を差し伸べるが僕はそれを払いのける。

「僕は2ヶ月前……僕の全てを消し去つた

「お前等に、僕の気持ちはわからないだろ」

「…………」

「庵？ なんで？」

「…………」

「…………」

羽岡は黙り、ゆかりは僕に質問する。

僕は黙るだけ。

「僕は、お前等を本当に友達と思ったことはないんだよ。なれなれし過ぎなんだよ――」

それだけ言い残し僕は反対方向に走り去る。

前にも1度、こんな事があつたはずだ。

そうだ、神崎魅瀬……あいつだ！！

アイツと初めて会つたあの時だ。

人の心境を見抜いたアイツなら……。

この、深い闇に落ちた僕を……救つてくれる。

そう、思った。

……ただ……なんとなくだけれども。

根拠も……何も無い

『キミのピアノにキミ自信が存在してるんだよ』

彼女の言葉が僕の思考の中に蘇つた。

「……しまつたな、ノープランすぎたか」

住所がわからなければ意味が無いじゃないか。  
ご利用は計画的に。の、CMを思い出す。

そうですね……。

そうだ……

こんな時にこそアイツじゃないか！

僕は近くにあつた公衆電話に入り、アイツに電話をかける。  
テレホンカードを入れてあいつの家に電話をする。

「五十嵐だな」

『キサマはハ神庵かあ！？ なんだキサマー！？』

「落しつけ馬鹿」

『馬鹿とはなんだ！？ 遊馬様と呼べー！』

『で、五十嵐聞いたい事があるんだが』

『無視か！？ キサマに耳はないのかー！？』

「アホ、耳がないことキサマの声が聞こえないわ

『ああ、やうか』

「納得してどうする？..」

『つたへ、お前が電話するんだから重要なことなんだ！？』

「……そんなに重要じゃないな」

『おこー。』

「まいい。神崎の家の住所を教えて欲しい。お前なりじつてるだ  
うへ。」

『魅瀬ちやんの？ お前にはゆかつけやんが居るじゃないか？』

「どうしてだよ？」

『お前等付き合つてゐんじや？』

「誰がいつ言つたんだよ？」

『オレ』

「テメーかあ……」

「いろんな事があつたが神崎の住所をてにいれた。

神崎に会えば……。なにか、大きく変わるよつた気ががした。  
いや、期待……なのだろうこれは。

nonome

Yukari Shi

「…………」

私は布団の中ですと泣いていた。  
庵の言葉が胸に突き刺さつっていたのだ。

『お前等に、僕の気持ちはわからないだろ』

私は本来の庵を見ているつもりだった。けど、あの時の庵は私の知らない庵だった。

全てを受け入れず。すごく、冷たい目をしていた庵だった。  
なにも、隠してないのがわかつた……。17年近くも一緒にいたのだから。

私は初めて全ての感情を表に出した庵を見た……。  
私だけでもない……羽岡ですら息を呑んでいた。

私は庵を知つていて庵を知らなかつたんだ。

それが、凄く悔しかつた。

もしかしたら、私があの庵さえ……知つていれば……こんなことにはなつていなかつた。

そう、考えてしまつたから。

あんなに、近くに感じていた庵が……消えていた。

♪ピンポーン♪

下でインター ホンが鳴つた。

庵かもしれない！？ そんな、勘が私の中に駆け巡つた。  
急いで、階段を降りて玄関のドアを開ける。

ゆかり……

そんな幻聴が聞こえた。

「ゆかりちゃん！？ 庵は！？」

玄関の前に居たのは、庵ではなかつた。  
八神の長男の八神卓さんだつた。

「す、卓さん！？ なんでここに？」

「庵は！？ 庵は居る？」

その言葉の真意が私にはわからなかつた。

「ＧＰＳ！ 庵のケータイ……つはあ」

「！ 庵の携帯にＧＰＳがついていて、それを辿つたらここに？」

「そう！ 庵は？」

なんで？ なんで庵の携帯のＧＰＳがここに反応してゐるのよ？

私はそれを繰り返すのみだつた。

すぐに自分のポケットから携帯を取り出して庵の携帯に電話をかける。

卓さんに上がつてもうひとつ発信源を探る。

反応は私の部屋であつた。

私のハンドバックの中で庵の携帯は鳴り響いていた。  
いつたい……いつ、私のバックへ？

私は幾つかの疑問符を頭の上へ挙げていた。

「東区3丁目……」さう辺だよな?」

僕は未だに神崎の家を探していた。

昨日の汗と雨と、さらに今日の汗で服が本当に気持ち悪かった。

1  
ん?  
」

子供が球遊びをしていたのが視界の中に入ってきた。そんなに珍しくは無いと思うが危ないなあと、思った。

ここは歩道が狭くて車の通りが結構多い。  
しかも、左側で、車の往来が多い。  
バリアフリーな歩道がうれしい。

ヒヤヒヤしながら僕は子供を見ていた。

案の定だ。子供はボールを取りこぼし、球は公園から毀れて、車道にでる。子供は道路へと取りに向かう。

「！」

子供からは視野に入つてないだろうが、子供の反対側に居た庵からは視界に入つた……。

トラックだ。

おいおい……上手く行き過ぎだろ！？

体が一瞬、硬直した

「危ない！！」

「？」

ボールを取つて大きな声をだした僕の方向をみて立ち止まる。

「ちい！…」

硬直していた身体を無理矢理働かせ、全力で駆ける。  
もつと速く……速くしないと！！

赤の他人でも……死なせて為るものか！！

＜ドロン！＞

その轟音は周囲に響いた。

Hakuto Ha

neoka

「・・・・・・・・・・・・

オレは庵を自分に例えて考えていた。

もしオレが……サッカーは好きだけどヘタで才能のある親友……いや、弟の雄祐ヨウスケで考えてみよつか。コウがサッカーの天才となつていたら?

幼少の時からやつていたものを好奇心でやり始めた弟が才能を開花させる。

親の目は弟に向いて、監督も、友人もコウしか見えなくなる。そして、オレは……オマケ扱い……。いや、『落ちこぼれ』なのだらう。

……庵はこれ以上にも悔しかつたのだろうか? 才能があつたオレにはわからない。  
オレだつたら凄く努力してがんばりうとする。  
もちろん、コウの方も力をつけるけど。

庵は人が良すぎるんだ……。  
オレだつたら譲れない。

譲りたくない。

考えただけでも……憎くなつた。

帰つたら苛めてやる。

……庵は、それを譲つたんだよな。アイツは……優し過ぎなんだよ。

『危ない!!』

そういう少年……歳は同じぐらいだらうか? 少年が叫ぶ。  
コウが居ない!!

さつきまで、野球の練習をやつていたコウが忽然と姿を消していく。

イヤな予感が全身を駆けた。こここの歩道は狭いんだ。

「コウー！」

公園から勢いよくオレは飛び出すが……直後。

「ドーン！」

その轟音は辺りに響いた。

I o r i Y a g a m i

僕はどうなったのだろうか？　あの子供は……助かったのかな？  
僕の思考の中に、それが残つた。

助かれば……良いなあ……。

そう、考える。

——自分の生死より他人の心配をするんですか？

どこからか、幼い少女声が聞こえた。いや、頭の中に響いた。

「？　お迎えかな？　どうせこんな声が聞こえるなんて僕があの子供を突き飛ばして僕が弾かれたんだろ？」

——人間にしては、理解が速いじゃねーか。

次に、幼い少年の声も脳内に響いた。

「死は受け入れるよ、僕は……」

それが、1番……本当に楽なのかもしれないから。

——珍しいね？ 普通の人なら死から逃げ出そうとするのに？

——けえ！ 新手のMかよ。

「んだと？」

——この、馬鹿が失礼なことを言つてスミマセン。  
——馬鹿言つた。

——こいつ等……馬鹿か？

「聞いていいか？ 君達はなんだ？」

“生と死の最終審判者です（だ）”

——私は俗に言う天使

——オレは悪魔

2人の声が重なった……仲が良いんだか悪いんだか？  
つてか、天使と悪魔……なあ……。

「死でいいよ」

——自殺志願者？

「やつじゃない」

自殺なんかしたくもない

——じゃあ、なんだよ？

「僕は必要のない人間だから……誰からも、僕を僕として見ないか  
ら」

暗いトーンで話しかける。

誰も……僕のことを必要としていないのだから。

——良いの？ 泣いてくれる人も居るんだよ？ 帰りたいとも……  
——他の連中と違つて即断できるから乐じやねーかよ。

「僕はね……なんも無いんだよ」

——なにも……無い？

天使の声が質問してくる。

「僕が唯一……本気になつたものが奪われたんだ……だから、何も  
ない」

——唯一……本気になつたものだあ～？

「ピアノ……だよ」

——ピアノ……綺麗な音色ですよね。

「だよね」

—— そうかあ？ オレはギターとかの方が好きなんだけど?  
—— あんたねえ……。

「ギターも好きだよ……ってか、音楽は大好きだよ……、  
ま、兎に角……僕は『死』を選ぶよ」

—— いいの？

天使の声が僕を探る。

僕の決意は揺るがない。

まあ、神崎と話せなかつたけど……どうでもいいや。

—— LAST - JUDGMENT。

悪魔の声が聞こえる。

僕に、最後の審判が下されようとしていた。

田の前が真っ暗になった。

なにも、考えれないくて、ただ……胸が痛いだけで。

私は無意識のうちに足を崩していた。

八神庵が、交通事故にあつたのだった。

意識不明の重体……

「東雲……？」

どうやら……私は倒れたらしい。

冷たい床の感触がした……

最後に、羽岡が私に駆け寄るのがわかつた。

けど……それだけ。

hi

Yuumi Igarashi

「八神……庵が……？」

「はい。お坊ちやま」

僕は……自分の苛立ちが隠せなかつた。

アイツからの電話でただ事じゃないことはわかつていただろう！？  
あの、朴念仁で落ちこぼれで……と。挙げたら限が無いほどイヤな  
ヤツだつた……

けれども。

八神庵は最高の好敵手<sup>ライバル</sup>なんだ。

「アイツが居なければ僕は暇つぶしもできない。  
死ぬなら別に良いが。死ぬなよ！ 八神庵！！」

「お父様の、知り合いに名医がいたよな？」

「はい。五右衛門様です。奥様がお坊ちゃんをお産みになる時に危  
険な状態になつたお坊ちゃんを無事に生還させたお方です。たしか、  
緊急病院の名医だとお聞きしています」

「わかった。八神を助けてくれと伝えてくれ」

「わかりました。旦那様にお伝えします」

そう言いメイドが下がつた。

……なあ？ 庵……。お前が居ないと、競い合う相手が居ないの  
は寂しそうだ。

最後の審判が僕に告げられようとしていた。

——審判……完りよ「ちょっと、待って。メールにメア」

Iori Yagami

審判に待つた！　と、いう声が『聞こえた』

！！

——何故、あなたが？

この2人とは違つて……聞こえたのだ。  
しかし、この声に聞き覚えがあつた。

「神……崎？」

この声の主は、神崎魅瀬の声だった。

「やあ、庵」

しかも、本人だった。

「信じがたいがお前は神様つてこと？」

僕は胡座を搔きながら神崎に問い合わせた。

「キサマー、セレナ様に対しても前とは……」

この口生意気なガキはあの少年だ。  
茶毛の小学生くらいの男性。

セレナとは神崎の真名（本名）らしい。

「うーん。メア！ セレナ様の御前でそういうのは口にしないの…」

と、クソガキに注意する少女はメル……淡い光のような金髪の小学生くらいの少女である。

「いいのよ」

と、だけ神崎……いや、セレナ様が仰る。

「ねえ？ 本当に死んでいいの？」

「神崎……じゃなかつたな、セレナ様。僕はすでに決断しておりました」

にこやかに笑顔のまま僕はセレナ様に返す。

みるみる内に頬を膨らませる。

「神崎でいいよ」

「神様ですか？」

「キサマ！！ 神崎様の頼みすらきけないのか！？」

「アンタに言ってない言ってない」

と、メルが返す。

「……はあ～」

神崎はため息を落す。そして、真剣な目で僕をみてきた。  
僕は笑顔を消し。真剣な顔で神崎に向かい合つ。

「僕はまだ、死ね無いんだな？」

۷

肉体と魂が離れて切れてなしんたゞ?

なんとなく、感じていたことを口にする。3人の表情を見る限り

正角木の研究

「わくわく。俺は……正確に生きてる」

僕はそう呟くだけ。

「……ま、完全に魂と肉体が離れるまで待つてろよ」

と、メアが呑気に言う。

「神崎……お前が神なりよお……頼みたこいどがある」「ん?」

「兄貴の……悠一兄さんの腕を直してくれないか?」

神崎の目が真剣そのものになる。  
アイツの視線がオレから外れない。

「どうして…ナニが限られてたんじやないの？」

神崎が僕に聞いてくる。

「確かに、僕は兄貴を恨んでるよ。自分勝手な兄貴を……けど、尊敬……嫉妬でもあるんだ」

「嫉妬？」

神崎の代わりにメルが僕に問い合わせる。

「才能だよ。誰もが思うよ……天性の物なんだから。僕は、誰よりも兄貴を尊敬してるんだよ。僕とは違つて金賞を取る兄貴を僕は尊敬してたんだ。そして、僕もあんな才能が欲しいと……願つた。でも、才能と努力は違うって……最初から知つていたんだ。だから……兄貴がピアノを辞めるって聞いた時には怒つたさ。よくよく考えるとさ……何時の間にか……本心は、兄貴を事故に合わせたヤツを恨んでたんだよ……尊敬していた人物を奪われたのだから。本当は、兄貴の事が……大切だつたんだって」

「……治つたつて悠一さんはピアノを辞めるわよ」

相変わらず、僕から視線を外さない神崎が僕に……そう告げた。

「・・・・・・・・・・・・

神崎の次の言葉は……なんとなくわかつていた。

「兄貴は……僕を執念の力つていうのかな？ 兄貴は自分もピアノをやつてライバル心を持たせよつとしたんだろう？」

「……ええ」

とだけ、神崎は軽く答える。

普通逆効果だろおが……

「……。気に食わないんだよ。やれるなら僕はその実力をだしていいたさー！」

「出してても、お前の兄貴には勝てないんじゃないかな？」

「メアー！」

メルがメアに注意する。

確かにそうかもしけない。いや、そんなんだつ。

「でも！ 僕はね——

## プロローグだけど、終わり

「庵……オレさあ。高校卒業したらイタリアのセリエAに行つてみよつと思つんだ」

サッカーボールを上手にリフティングしながら、羽岡は僕にそう告げる。

これは、高校生活最後の春の事だった。その時、僕は大学の進学も決まり安定した時の事だった。

「そうか。お前はウチのサッカー部の救世主だもんな」

まだ、寒さが抜けないので、僕達はトレーナーを着ている。羽岡の蹴ったボールが僕の足元に転がる。それを、つま先でボールを上げてリフティングする。

「2年の冬……覚えてるか？あの時は12月なのに雨が降つてさあ。まあ、明日は天気が良かつたけどな。それよりよお？お前さ」「僕はお前達を友達だなんて思つたことはない」的な事言つたよな「うん」

僕は軽く答える。あの時の僕は本当に荒れていたから……。それに……精神的に不安定だから。言い訳にもならないけど……。

「オレさあ、やっぱり人の気持ちってわからないんだよな。お前がなにを考えてるか悩んでた……」

「悪い。あの時の僕はあ――……言い訳はしないよ。ゴメン」

ボールを羽岡の方に返す。

羽岡は美味く胸で勢いを殺して足元に運ぶ。

「違うよ、やつぱりオレは馬鹿だ。友達とは思つてないんだり?  
なら、『親友』だよなって  
「はは。羽岡らしげじゃん」

「だろ?」

親友……そう、言われた時、本当は泣きそうになつた。  
あんな、暴言を吐いたのに、この馬鹿は『親友』と呼んでくれた。

「がんばれ」  
「ん?」

僕は小声で呟いたが聞き取れなかつたみたいだ。  
だから、僕は大きく深呼吸する。

「がんばれ!　『博十』!  
「……あ、ああ!!!」

球が高く上がる。顔を上げてやつと見えるぐらう。そのボールは僕の手元に落ちていく。

「その前に英語すらできないだろ?」「うつ! 大丈夫だ! ハートが通じ合ひつい。」「ふつ。お前らしいな……」

羽岡と分かれて1時間もたたない。けど、僕にはとても長い時間

に感じた。

2年の冬を思い出してたからだ。

今でも、思い出せるよ？

『あの時』の、僕の『答え』……。

「でも！、僕はね……これで良いんだと思うんだ。それが生きている事で幾度なくあることなんだから。人と人は当然それぞれ違う、それを分かつてるから。人は……人なんだよ」

拳を強く握り締める。今なら、人生最高の握力を出してる感じがする。

「当然の事なんだけど……人は劣等感を覚える。「アイツに出来てなんで僕が出来ないんだろうか？」「僕の方が優秀なのになんでアイツが出来るんだ？」そう、考えてしまう。僕みたいに

飽きることなく、僕は続ける。

自分でも、久々にいっぱいしゃべってる。

「そり……完璧じゃないと許せないんだよ。人間って馬鹿だからさ。1日……頭を冷やしたよ」

「僕は僕だから僕のままでいいんだって」

「だから、知ったんだ。僕は僕らしく生きればいいんだって。僕は出会ったネコみたいに……自分の居場所すらないのに、他人の居場

所を作つてしまつ馬鹿なんだって。そして、ピアノが大好きな阿呆なんだってさ」

特上の笑みで僕はそう言ひ。

「俺は優しすぎるよ」

神崎がそう呟く。

「欲張りは言わないよ。僕はどうなつてもいいからさ。兄貴の事……頼んだよ」  
「それでいいんですか？」

メルが僕に質問してくる。

「僕は半分が死人だろ？」

「正確ではないけど。身体のほうが魂を切り離した時点でアナタは完全な死人。死なない限り私達は本題に入れない」

「……そう」

僕が犠牲になれば兄貴が助かる……考えが甘すぎたか。

「なあ、神崎？ 人には必ず価値がある……僕は……新しい自分を捗そうと思うんだ

もし……生きていたのなら……駄目なら、生まれ変つてからさ」

僕がそう、答えると。

神崎の手の平が僕に向かつってきた……

ケータイが鳴った。人が折角思い出してるつづーのに、ダレだよ？

「はーはー、僕の思考の邪魔をする馬鹿は誰ですかあー？」

「悪戯なら切りますよ?」

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

可放然る。いざるう?

恐る恐るケータイの画面を覗いて見る。

東雲ゆかりへそう、出ていた。

「私、  
邪魔あ?  
まい」

「なんで涙声なの！？ 僕が悪かつたからさ！ ゴメンつて！」

切れた。」「うーん、懲りぬよな。

……まあ。

どうでもいいか

布団の中に入ろうとするが、またもやケータイが鳴る。手にとつて着信を確認。〈東雲ゆかり〉と出る。

「なんだよ？」  
『ゴメンね 廬~~~~~』  
「煩い。なんのよつだ？ キサマも呼び出しか？」

「超能力者か！？」「超能力の才能あるんじゃないの！？」  
「ないない」

くつ。どいつもこいつも……。今日は厄日か?

「んで、何処に行けばいいんだ？」

学校

『忘れ物たなんて言つたら、友達の縁を切るぞ』

さうなり  
ゆかり  
この三日間樂した  
たる

僕は携帯の通話を切ろうとする

携帯からゆかりの絶叫が聞こえた。  
しぶしぶ、言い訳を聞くことにした。

「なに?」

『なんでわかるのよお？　じゃない！　今、切ひりとしたでしょー！　ちよつと！　話を聞いてよお。忘れ物もそうだけど、庵に会つて話したいの』

「またぐ。今から行くよ」

僕は、また一階に下りて。「出掛けたから」と、親に伝えて

玄闕

お気に入りのスニーカーを履いて外にでる。そして、歩きながら僕は学校へと足を進めた。

校門前に差し掛かつた。  
校門ではゆかりが待つていた。

なんだ？ 念入りに髪を手入れしてゐる？  
まるで、デート前の乙女だな

「おい。さつあと終らせて帰つぞ」  
「う、うん！」

ついた場所は音楽室だった。どうやら……この馬鹿の魂胆は……。

「ね、ねえ？ 庵？」  
「……お前……忘れ物は口実だろ？」  
「テヘッ」

忘れ物を口実に……また、僕にピアノを弾かせて……またピアノと向き合つて欲しいって事ね

「丁寧に……羽岡に五十嵐も居やがる……。

「お前等も隠れるなよ……バレバレ」  
「ちい。折角庵と話してセッティングの時間を稼いだつてのに  
「完璧だったのに……クソ」

第一 あんなに速く次から次へとくるかつてんだ。

「庵……」

「はあ～。1曲だけだぞ?」

「うだなあ……。

何を弾こいつか?

「うだ……これが、自分らしくのかもしれないな……」

フランツ・リスト作曲

「詩的で宗教的な調べ」 第3番

【孤独の中の神の祝福】

「ういえば……最後に弾いたのも……コレだつたな……」

「終りがコレで……始まりもコレか……」

「この譜面は頭の中にある……」

「うん。弾こいつ……コレからも。  
ずっと……」

「なあ? 神崎? コレで良いのか?」

「アイツの言葉を……思い出した。」

「最後に……アイツはこんな事を言つていた。」

『ツバサが折れたから庵は空に向けないんじゃないの。庵はね、お兄さんと戦うコトを恐れた勇者なんだよ。ツバサが折れたコトを言い訳に、お兄さんとピアノと向き合わなかつた。死を受け入れる勇気があるなら……お兄さんとピアノに立ち向かう勇気はあるよ。自

分の道を自分で曲げちゃ駄目なんだよ……庵には庵の音があるよ? ピアノの

自信持ちなよ』

「の、曲同様に……

僕の孤独の中に神崎が居たそして、彼女が救つてくれた……  
これは……本当に僕らしい……曲だ。

前に進めないRPGは……全クリは不可能なのだから。

前に歩いつ……魔王たる兄貴を超えるタメに。

行つてやるひ……待つてろよ兄貴……  
僕も、ヨーロッパの舞台に立つてやるからな。  
まずは……「」から始めて……。

孤独とはあり得ない、心の内に必ず一人は居るんだ  
自分を照らして前に押してくれる孤独の中の神様は  
自由のツバサで、高みの空へとも、押してくれる。

それを、みんなと出会えてわかつた。

神崎だけじゃなくとも……みんなが、僕の孤独の中の神の祝福となる者達なんだ。

前へ後押しを受けよつ……素直になつて。

鍵盤に自分の思いを乗せて弾き始めた。

やっぱり僕は……ピアノが好きなんだ

これが、僕の物語……終つて始まる……  
間逆の物語……

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8937d/>

自由のツバサ ~loneliness in god blessing~ 連載バージョン

2010年10月24日14時00分発行